
献 辞

佐 藤 達 郎

川端康雄先生は、2002 年 4 月にイギリス文化研究担当の教授として本学に着任され、以来 21 年に渡り文学部英文学科の教育に尽力された。授業では、卒業論文の指導はもとより、イギリス文化講義、イギリス文化演習など、イギリス文化研究分野の主要科目を担当され、赴任当時設立されたばかりの同分野の教育の発展に多大な貢献を果たされた。又、公務においては、学務部長、文学研究科委員長、学長補佐など、学内の要職を歴任された。

本学での多忙な日々にもかかわらず、先生は、研究において精力的に活動された。本学赴任後のご業績は、著書 26 冊（単著 7、共著・分担 19）、学術論文 28 点、口頭発表 44 回、翻訳 21 点（単独訳 4 冊、共訳・監訳 6 冊を含む）、評論・エッセイ 57 点、書評 22 点、その他短文 18 点、招待講演・公開討論等 16 回、である。これらの中には、『『動物農場』ことば・政治・歌』、『葉蘭をめぐる冒険——イギリス文化・文学論』、『ウィリアム・モリスの遺したもの——デザイン・社会主義・手仕事・文学』、『ジョージ・オーウェル——「人間らしさ」への讃歌』、『増補 オーウェルのマザー・グース——歌の力、語りの力』といった単著と共に、ウィリアム・モリス『ユートピアだより』、『小さな芸術——社会芸術論集 I』、ジョージ・オーウェル『動物農場——おとぎばなし』、ジョン・ラスキン『ゴシックの本質』等、翻訳の代表作が含まれているが、この量質ともに優れたバ

ルザック並みの成果は、到底常人ではなし得ぬ偉業であり、先生の日頃の雑務を目の当たりにしてきた私にとっては、一つの驚異である。

モリス、ラスキン、ラファエロ前派、オーウェル、レイモンド・ウィリアムズに関するこれらのご論考を論じる資格は私にはないが、この度、一人の素人の読者として、『増補 オーウェルのマザー・グース——歌の力、語りの力』を読み直し、あらためて先生の偉大さを痛感した。これほど作家とその作品に肉迫した手応えのある論考を近年読んだことがなかったからである。博大な学識に基づいた確固たる事実の積み上げ、テキストの細部を掘り上げていく豊かな文学的感性、他者を根底から理解しようとする優しい眼差しと倫理性——それらが渾然一体となって、オーウェルの思想を掘り起こし、その思想の深部には、イデオロギーといった主義信条では処しきれない「歌」、ディストピアの闇に鳴り響く民衆の生命の歌が脈々と流れている。その歌に心を打たれるのは、それがオーウェルの歌であると共に、オーウェルという対象に限りなく接近した先生ご自身の歌であるからであろう。英文学科で先生と共に働くことができないことは、誠に寂しい。だが、退職後の先生は、公務のくびきから解放されて、その生命の歌を一層力強く我々に歌い続けてくれるに違いない。英文学科の一員として、長年に渡る学科への多大なご貢献に謝意を表すると共に、先生の今後の益々のご活躍とご健勝をお祈り申し上げる次第である。
